

糸に囚われた少女たち 前編

著者：pokepure(マリオズキ)

私、星崎かむりは臆病だ。

大きな音がしたら友人たちと比べて大きくビビるし、真っ暗なところなんて当然 1 人で行けない。どんなに些細なことであっても驚いた時は頭の中がどうしようもなくなってパニックになる。息が苦しくなったり、手足が震えるなんて日常茶飯事といってもいい。

だって、怖いから。

そして、気も弱い。

よほどのことでなければ、人から頼まれたり誘われたことに『わかりました』と行ってしまふ。ちっぽけな勇気を振り絞ってためらってはみるけど、結局気づけばそんなことになっている。

だって、恐いから。

……なのに。私はどうして。

「うおー！！ すっげ、本当にでっかいなあこの屋敷って。ウチ、こんなデカイと思わなかったわ」

「ほんとだねえ〜。^{まひる}葉燈流ちゃん」

「ちょっと、これ入っていいの？ これじゃあただの不法侵入じゃない。てっきり管理者か誰かに許可を得ているのかと……」

「えー？ ダイジョブだって。どうせ誰も住んでないし、みた限り管理もろくにされてなさそうじゃん」

「……」

古びた朽ちかけの屋敷。そのエントランス前で私以外の 4 人が口々に話す。楽しそうにしている奴もいれば怪訝な顔をしている子もいるし、複雑な表情で黙る子もいる。……最後のは私だ。

「んじゃ〜、そろそろ行きますかね！ えっと、この屋敷の中をくまなく見てって 2〜3 時間ぐらいしたら帰るってことで。さっ、思い出づくり&肝試しのツアーに一。れつつ〜、ご

ー！」

「「「ごー！」」」

気の進まないこの企画の発案者が元気よく高らかに右こぶしを突き上げて叫ぶと、みんなも合わせて続いて軽やかに歩みを進める。

「……ごおー」

対して私といえば、力のこもらないふにゃふにゃした弱々しい声を上げていて、心なしか足取りが重い。怖いのは嫌いなのに。いや、だからというべきか。ため息交じりに私の心が叫んだ。

「はあ……」

——どうしてこんなことになった！

それは一昨日の放課後のこと。

私たち5人は、むせるほど暑い夏の日差しが少し和らいだ西日が差し込む教室の中で”ある噂”について話していた。

「あー、知ってる知ってる。なんだっけ、『誰も住んでないはずの屋敷から、時々変な音がする』みたいなやつだっけ？」

「あら、私も知ってるわ。夜中にあのあたりの近くを通った人が『^{あか}赤い眼をした幽霊を見た』なんていうのもあれば、冗談半分で入ったは良いもののそれから連絡がつかない人がいるとか。まあ、いろいろ噂は絶えないわね」

「……、はあ……」

「へえ〜。すごおいとこなんだねえ。それでー。^{まひる}業燈流ちゃん、その屋敷がどうかしたのー？」

私の座る席の四方に友人4人が座って話し込んでいる。真ん中で黙ってため息をつきながら本を読んでいる。……ふりをして内心怖がっているのを隠しているというのに、なんとも

迷惑な話だ。いつもなら、もっとこう積極的に話の中に入るんだけど、今回は内容がダメだった。

「あー、そのね。ちょっと提案があつてさ」

そう言って照れ臭そうに頭をぼりぼり掻いたのは今回の話の発端。^{まひる}葉燈流だ。彼女はすごく活発な子で、部活動は陸上部。加えて優しいときたまんだから、もしも彼女が男の子だったら惚れてたかもしれない。

「ほー、珍しいじゃん。^{まひる}葉燈流がそんな提案なんて」

こいつは^{やどり}宿厘(やどり)。この中では一番男勝りで、割と口調は荒い。そしてあっけらかんとした性格に若干難はあるけど、万が一に備えて色々持ってきてくれたりと気配りがうまい。
「ていあんー？ なになにー」

このなんとも間延びした話し方をする、のほほんとした雰囲気の子が^{つむぎ}紬ちゃん。私ほどではないにしても、この中では結構怖がりな方だと思う。

「提案……？ ——まさか、あなたっ。ま、まあいいわ。^{まひる}葉燈流、続けて」

怪訝そうな顔で^{まひる}葉燈流の方を見ながら^{なぎさ}凧咲(なぎさ)は言った。彼女は別に委員長でもやっているわけではないけど、だけどイメージとしてはそんな感じのする子。ハキハキと喋って制服をきっちりきこなしている。

「うん。次の日曜日にさっ、みんなで行かない？」

「『『『えっ』』』」

^{まひる}葉燈流から出たある意味衝撃のその一言に、私は啞然とした。みんなも同じように驚いている。そりゃそうだ、明らかに危ないってことがわかってるんだから。よくない噂が出てる中で大した理由もなしに意気揚々となんて誰が行けるのか。だけどそんな雰囲気を察したのか、^{まひる}葉燈流は少しだけ声のトーンを上げて話し始めた。

「いやさー、あと1ヶ月ちょっとで夏休みになっちゃうじゃない？ 今の所あんまり予定入ってないけど、しばらく会えなくなるかもって思っちゃったらその前に何かしら思い出

に残りそうなことやろうかなって」

「やっぱり、そういうことね」

呆れ顔で軽く頭を抱えながら^{なぎさ}風咲がぼつりと呟いた。

^{まひる}葉燈流のことだ。当然、私がこういう類に対して乗り気ではないことは知っている。私以外

でもきっと、そういうことを考えているはず。気づけば^{まひる}葉燈流以外の全員が静かにうつむいたり何やら考え込む動作をしている。せっかくだけど、このまま流れてくれないかな。なんて思うけど、堅実はそんなに甘くないらしい。その沈黙を打ち破る人間がいた。

「うーん。そっかぁ……、そうだよねぇ。確かにしばらくみんなとあんまり会えなくなるかも〜って思ったら、^{つむぎ}紬。やりたいかもなぁ？」

私は目を見張った。まさかあの^{つむぎ}紬が、真っ先に賛成する側に回るとは思わなかった。その言葉がきっかけになったのか、各々が口々に『危険かもしれないけれど、思い出としては悪くはないかも』ということを使い始め、気づけば一緒に行こうという雰囲気の流れ始めている。

——となれば当然。

「ねえねえ、かむみも行こうよ！」

こうもなるわ。

読んでいた本を取りあげてご丁寧にしおりを挟むと、^{やどり}宿厘は空いた私の両手を掴んで瞳を覗き込んできた。私は無意識に目をそらした。

「い、いやぁ。わたしは遠慮しとくよ」

だけど^{やどり}宿厘は諦めない。

「えーっ。そんなこと言わないでさー！ ダイジョーブだって、そんな幽霊なんて今のご時世いるわけないんだしっ。もし危なくなったらさっさと逃げればいいだけだって。いーこーうーよー」

手をブンブンと振りながら^{やどり}宿厘は眩しいくらいに純粋な笑顔を向けてくる。ただただまっ

すぐに『面白そう』『楽しそう』というだけ他意のない笑顔。こういうところは好きなんだけど、今に限っては嫌いかもしれない。

「でっ、でもっ……」

目をそらしたまま自然と苦虫を噛み潰したような表情になるのがわかった。やばい。押されてきてる感じがする。だけどここは、頑張って拒否しなきゃ……。とちっぽけな勇気を出して決意したその時、横から震えるような声が聞こえた。

「かむゐい……。やっぱり行きたく、ない？ ^{つむぎ}紬、せっかく^{まひる}茉燈流ちゃんが考えてくれたから一、行きたかったんだけど……な〜。そっかあ……。ごめんね」

今にも泣きそうな瞳でモジモジとしながら ^{つむぎ}紬 は謝っている。そしてしょんぼりとしながら、

「無理強い、しちゃったかなあ」

と静かに呟いた。

そんなこと言われちゃったらもうどうしようもないじゃん！

「わかったっ、わかったから！ 行く！ 行くからそんな顔しないでよ、ね？」

と、なだめるように行くという意思を伝えてみる。すると、先ほどの^{やどり}宿屋よろしく涙まじりににへらと笑ってくれた。

それを確認した^{まひる}茉燈流は高らかに宣言した。

「よしっ、じゃあ決まりだな！ 次の日曜日の、そうだな。午後三時に例の屋敷の前に集合だ！」

* * *

大きめのエントランスをくぐった屋敷の中はとても薄暗い場所だった。唯一の明かりは窓から差し込む光だけ。

外は夏の日差しが暑く照りつけて蒸し暑かったのに、ここはむしろ逆。ひんやりとしているどころかジメツとしていてどこかカビ臭い。

「予想通りというかそれ以上というか、思ったよりも暗いのね」

なんともなしに出た^{なぎさ}風咲の言葉に、^{まひる}茉燈流は言った。

「一応日の一番入りそうな時間を選んだつもりだったけど、そうだね。あー、やっぱ自然はすごいわ」

そういえば、と私は屋敷の外の様子を思い出した。どうもかなりの間手入れされていないようで、木は生い茂っていてシッタだらけだった。こんだけ暗いのも何だか頷ける。行政も一回ぐらい綺麗にしようとか思わなかったのかな。

「懐中電灯の一つでも持ってくればよかったなあ」

「お、あるけど使うか？」

「ええ〜、ほんとー？」

「おうよ、ちょっと待ちな」

^{やどり}宿屋は突然しゃがみこむと木々の隙間から差し込む自然光を頼りに家から持ってきたであろうたいそう大きなリュックサックを漁り始めた。よく持ってこれたなんて感心しながらその様子を見守っていると、バラバラと音を立てながら薄汚れた床の上に三本の懐中電灯が転がった。

「おおー、さすが^{やどり}宿屋ちゃんだあー！　すごーい」

「えへへっ。一応持ってきたんだけど役に立ってよかったな」

^{つむぎ}紬に褒められた^{やどり}宿屋は微妙に頬を染める。いや、そんな照れることでもないと思うんだけどな。

「——あら。これだけなのかしら」

「ああ、そうなんだ。本当はね、1人一本持てればいいよなって思ってたけど家になくてさ。ごめんね」

「別にいいわよ、それくらい。わざわざ持ってきてくれただけでも十分。だけど、ちょっと困ったわね」

^{なぎさ}凧咲は人差し指を立てると人数を数え始めた。釣られて私も数えてみると、なるほど、そういうことか。2人で一つずつ懐中電灯を共有したとしても、誰か1人は単独で行動しなくちゃいけない。

こんな薄気味悪いところで『隣に誰かがいてくれる』という感触と安心感がないなんて、私だったら絶対にごめんだ。ただでさえこんなところでしんどいのに。

それを察したのだろう。^{なぎさ}凧咲はおもむろに一本の懐中電灯を手にとると、大きく肩をすく

めて言った。

「いいわ。一本は私が使うから」

「え、マジ？」

その一言に^{まひる}葉燈流は目を見開いた様子で問いかける。

「本気よ」

即答だった。なんというか、凄いなあ。

「うわ、^{なぎさ}風咲ありがとう！ 本当に助かるわー」

「ちょっと、やめて。まったく痛いわね……。そんな強く背中を叩かないで」

「おっと、そんなに強かったか。ごめん」

本人的にはあまり意識していなかったようだけど、叩かれた本人がそう言うのならばそう

なのだろう。といった様子で、深々と^{まひる}葉燈流は頭を下げた。

「あはは一。じゃあ組み合わせは～」

ビビり同士の私と^{つむぎ}紬は少なくとも別にしようと言うことで組み合わせが決まった。

一陣に^{なぎさ}風咲。次に^{つむぎ}紬と^{やどり}宿屋で、最後に私と^{まひる}葉燈流。じゃんけんって本当に便利だ。

薄暗闇の廊下を3つの丸い光が蛍のように踊る。

隣に^{まひる}葉燈流がいてくれるとわかっていてもこの暗さはやはり怖い。

私が^{まひる}葉燈流の右腕を掴んでぴったりくっついてしまっているせいで少し歩きにくそうだ。

だけどそれでも先のわからない恐怖でうまく歩けない私に、文句ひとつ言わずに自然な様子で歩調を合わせてくれていてとてもありがたい。

ところどころ朽ちた廊下をゆっくり進んでいると、私と^{まひる}葉燈流の前を進んでいる^{つむぎ}紬の顔

に頭上からなにやらふわりと軽く、しかし微妙にベタつく何かが落ちてくるのが見えた。

「ひゃあ！？ なっ、なにに！ いやあああ！！！」

つむぎ
紬 のつんざくような悲鳴に驚いた私はもう頭の中が大変なことになっていた。生まれつきずっとこう言う体質だったおかげでみだりに声を上げて叫ぶようなことはない。だけど心臓は痛いほど打ち続けるし、膝はガクガクと小刻みに笑い始める。まひる
葉燈流の腕を掴む手はより一層力が強まっていた。

その力に流石に耐えかねたのか、硬直しながら掴み続ける私にまひる
葉燈流が抗議の声をあげた。
「ちょ、かむみ痛いって。ほら、大丈夫だから落ち着いて、ゆっくり深呼吸しよう。わかった？ ほら、つむぎ
紬 も！ ただ蜘蛛の巣が落ちてきたただけだから、そんなに慌てないでっ。ほら、取ってあげるから。……よっと」

懐中電動を持っている左手でつむぎ
紬 の頭にかかった糸を払いのけた。

「いやっ、気持ち悪いいいいっ……——ふえっ。なあーんだ、蜘蛛の巣だったのかあ。よかったー。ありがとお！」

つむぎ
紬 はその正体がわかるとすぐに落ち着きを取り戻した様子で胸をなでおろした。だけど私はそうもいかない。言われた通りに息を整えてはいるけど、そう簡単に落ち着くなんて無理だ。

そんな私に見かねたのかなぎさ
風咲が提案してきた。

「足が疲れたから、ちょっと休憩にしましょうか。みんな」

一旦休憩を取るようになった私たちは木製の床に腰を下ろした。。

みんながいることに安心しながら、私はゆっくりと心を落ち着かせていると、まひる
葉燈流が背中を優しくさすりながら心配そうに話しかけてくれた。

「かむみ、大丈夫か？ あんまり無理しちゃダメだぞ」

「だ、大丈夫だよ。ちょっとその、驚いただけだし」

「2 人とも、蜘蛛の巣程度でそんなに驚くかー？」

茶化すようにやどり
宿屋は言うけど、その顔にはしっかり”心配”の 2 文字が書かれているように見えた。

「蜘蛛の巣程度って……。こんな気味の悪いところで変なのに当たったらそうなるって」

私が膨れ面で眉間にしわを寄せると、^{つむぎ}細がそれに便乗するかのようにつける。

「そーだよおー。^{やどり}宿厘ちゃんとか^{なぎさ}凧咲ちゃんは怖くないのー？」

「えっ、まあ。怖いには怖いけどみんないるしなあ」

「全く怖くないわ、なんて言ったらさすがに嘘になるわね。でも、ソコアで騒ぐことでもないでしょう。こう言うところに虫とか蜘蛛の巣はツキものよ」

^{やどり}宿厘はこちらに話が振られるとは思ってなかったのか虚を突かれたらしい。

^{なぎさ}凧咲は^{やどり}宿厘の様子にうっすらと笑うと、軽く伸びをして立ち上がって言った。

「さて、行きましょう」

……流石、余裕のある人は違うな。

厨房（と思しき場所）やいくつかの広めな部屋（来客用かな）を見て回りながら、内装の^{けんらん}絢爛さに驚く。放棄されるまではきっと多くの人が屋敷の主人にでも招かれていたんだろう。

先はまだずっとあるようだと思いながら、でもまだ時間には余裕があるし、もう少し行ってみようとなったとき、ふと私の足元を素早いナニカが走り去っていくのを感じた。しかもそのナニカは、あまつさえ肌に触れたらしい。

「うわぁっ！！！」

「だっ、大丈夫かかむゐ！？ どうしたっ」

突然大声を出した私に驚くも、^{まひる}葉燈流は倒れそうになる体を抱き寄せる。しかし私の脳はそのことにすら気づけないほどに”あること”に支配されていた。顔からさっと血の気が引いていくような感覚、そして額から冷や汗が流れているのがわかる。

私は気づいた。気づいてしまったんだ。そう、さっきも^{なぎさ}凧咲が言っていたのにここまで一切その姿を見なかったアレ。だけどその確信に近いものを疑惑のままにしておきたくて、胃底して欲しくて、私は震える口をなんとか立たせてみんなへ問うてしまった。

「ね、ねえ……。私の、気のせいならいいんだけどさ。いや、うん。本当に気のせいだといんだけど」

「なんだ？ かむみ、そんなまごまごしてないで早く言えって」

しびれを切らしたように急かす宿^{やどり}厘に促される形で、私は話した。

「う、ん。なんていうのかな、気づいたんだけどね。普通、ここにいるべきものがなんでここにくるまでいなかったんだらうって。エントランスとか、さっきの部屋までには全然いなかったのにこのあたりまで来てようやく出てきた」

「ここに～いるべき、ものお？」

「そう、さっき風^{なぎさ}咲が言ってたことでもあるんだけど」

自然と、肌が泡立つ。震える様子にピンときたのか、私が口を開く前に風^{なぎさ}咲が言った。

「——蟲、ね。そうでしょう？」

私はゆっくりと頷いて肯定する。

はっきり言って、私はあの存在が好きじゃない。想像しただけでもあのなんとも言えない軽い感触と気味の悪い音に、嫌悪を抱く。

「……まあ、言われてみれば確かにおかしいな。だけどそんなに気にすることか？ 相手は生き物だし、そんなどこにでもいるってわけじゃないさ。まいいや、ほら、虫除けスプレーあるから使えよ」

「あ、ありがとう」

そう言いながらカバンの中から取り出されたスプレーを体に吹き付けながら思う。

蟲とは言っても全てがダメというわけではない。超とかカブトムシとか、小さなアリみたいな

なのならそこまで怖くはない。だけれど。……宿^{やどり}厘は気にすることじゃないと言うけれども、やはりここは何処かおかしい、ただの屋敷ではない。そんな感じがしてならなかった。

歩くたびに木製の床がギシギシと鳴る。すっごく怖い。こんなのいつ抜けてもおかしくないよね。なんて思いながら長い廊下をしばらく進んでいると、私たちの目の前にとても大きな扉が現れた。

それは大人の男性が縦に 2 人分ぐらいはスッポリと収まってしまいそうなほどに高く、上部が半円状に丸い。ツタやイバラのようにも見える細部までこだわられた装飾があつてなんだか、どこか荘厳とした印象がある。

「おぉーきいー！」

つむぎ
細 が目を輝かせながら声を上げて興奮し始めた。そういえばこういうゴシック建築的なのが好きとか言ってたっけ。

「……行くの？」

「いくー！ なにがあるのかすごいきになるもんー！ うわぁ……、すごいなあ。こんなところがすぐ近くで見れるなんて思わなかった～」

すっかり扉に心を奪われてしまった つむぎ は私への返事なんてそっちのけで興味津々らしい。でも一応他のみんなにも聞いておいたほうがいいか。……頼むぞ。

「みんなは？」

「そりゃそうでしょ、せっかくきたんだし」と ^{やどり}宿屋。

「良いよ。せっかく楽しそうでよかった」と言ったのは ^{まひる}柔燈流で。

なぎさ
屈咲に関しては『仕方ないわね』とでも言う風に肩をすくめるだけだった。

私の静かな願いはいともたやすく崩れ去った。せめて誰か 1 人でも断ってくればなあ…。

全員で重々しい扉に手をかけて、ゆっくりと奥に押し込んでいく。5 人が同時にやってこれなら、とても 1 人では開けられないだろう。ふわりと小さく巻き上げられた髪の毛に、廊下に漂う空気が部屋の中へとなだれ込んでいくのがわかった。

「これは……すごいね」

「ああ、こんなに広いところがあるとは正直思わなかったな。驚いた」

中の部屋は私たちの想像よりも大きなものだった。ホコリや土のようなものを被っただだっ広い床にところどころ穴が開いてほつれた絨毯。天井からはところどころ蜘蛛の巣が張られたシャンデリアがいくつもぶら下がっている。確か、こう言うところのことをダンスホールって言うんだっか。

だけど正面奥にはよく劇場とかで使われている舞台のようなものがあつて、緞帳は閉まっている。

なんと言うか、天井の少し低い体育館っていう感じだな。いや、流石にそれはちょっと失礼か。

壁の窓から覗く陽の光はすっかり落ちてきているらしく、随分と鮮やかなオレンジ色をし

ていた。ここを見終えたら帰ろうって提案しよっと。

「ねえーねえー！ みーんーなー！ この中何かあったりするかなあー？」

その声がする方を見る。するといつの間にか ^{つむぎ} 紬 が舞台の上に乗って柔らかな髪の毛を飛び跳ねさせながら、幕を揺らしていた。

やどり
宿厘

「ええー、でもおー」

「いいから、とにかく降りろ」

やどり
宿厘の怒るような声に ^{つむぎ} 紬 は渋々、舞台から降りてくる。その時だった。

ズズ…、ギ……ギイイイ——ボタン

それは、あの大きな扉が勢いよく閉まる音。なんで？ あそこには誰も近づいていない。そもそも、閉めることなんてできるはずがないのに。そう思った矢先、次は窓から差し込んでいた光がザアッという木の揺れるような音とともに消えていく。あたりはすぐに真っ暗になる。

「なっ、なに！？ いきなりなんでえ！ いやっ、いや……」

「かむゐ！」

気づけば、ポタリと自然に涙がこぼれ落ちていた。時々溢れるわずかな光ともつれながらも

とっさに点けた懐中電灯の光。そしてとっさに来てくれた ^{なぎさ} 凧咲と ^{まひる} 葉燈流が、とても頼もしかった。

どうやら人間の頭脳は都合がいいようにできているらしい。あまりの恐怖に耐えられなくなったのか、私はワタシを切り離した。比較的、落ち着いているような感覚を覚える。濫りに狼狽えないワタシは、ワタシであって、私じゃない。

緞帳がせり上がった舞台の上に、1人の女性の姿が現れた。少しぼやけた光の中に浮かび上がる顔立ちはとても美しく、少し大きいビー玉のような目の瞳はとても鮮やかな赫をしている。黒く長い髪の毛に、逆さになった彼岸花を思わせるような紅い髪飾りが映える。シルクのような白いドレスを身にまとい腰から下は一切隠されている。

——どう考えても怪しい。どうしてこんな場所に、この女性はいるのか。長らく誰も住んでいないはずなのに。

脳裏によぎるのは、あの噂。ここは関わらない方が得策だろう。だけどそんなワタシの考え

は伝わることなく、無用心にも、最も近くにいた^{つむぎ}紬はその女性に声をかけてしまった。

「おねーさん、だれですかー？」

女性は、^{つむぎ}紬の方をじっと見るだけで何も返事をしない。ただ、口元から真っ赤な舌をのぞかせるのみだった。

「^{つむぎ}紬！ 早くこっち来い！」

「うっ、うん！」

手に持った懐中電灯の光を頼りに^{やどり}宿屋の元に着いた^{つむぎ}紬と同時に、ゆっくりと女性が歩み寄ってくる。

少しずつ高くなる高さ。時折聞こえるは人なら絶対に出せないカタカタという小さな音。そしてあの体の、一体どこに蔵われていたのだろうか。みるみるうちに豪快な音を立てながら、黒く細い節くれだった——”八つの脚”が女性の煌びやかな服を突き破るように出てくる。

あれって……、もしかして。

「^{じょうろ}絡新、^{ぐも}婦」

誰からともなく聞こえたその声はかすれるほどに小さく、震え、怯えていた。確か古典の授業で習ったと思う。『美しき女の姿』に化けることのできる妖怪の一種。

「あ……、うあっ……」

ワタシはもちろん、その場にいた誰もが動けなかった。得体の知れない恐怖に支配された心は頭からの「とにかく逃げろ」という命令をも無視してしまっていた。心臓はうるさいほどに音を立てて鼓動する。

だけどその時、視界の隅で動く姿があった。^{じょうろぐも}絡新婦じゃない、^{つむぎ}紬だ。

ふらふらとおぼつかない足取りでぎこちなく、だけど着実に絡新婦のいる舞台の上へと歩み始める。その横顔は確かに、恐怖に怯えていた。

「ちょっ、ちょっ^{つむぎ}と紬！？ あなた、何してっ」

私の口が勝手に叫ぶ。あんな、明らかに人間じゃないやつに自分から近づくほどバカではないはずだ。なのに一体どうしたって言うのか。

「わからない。わからないよぉ……。勝手にっ、かってに足が動くの！ 何かに引っ張られてるみたいでっ。助けて！」

助けを求める^{つむぎ} 紬 に、我を取り戻した^{やどり} 宿厘が^{つむぎ} 紬 の手を掴んだ。その様子に私もようやく恐怖心から解放されるような感覚がした。だけどやはり足は動かなかった。むしろハの字に足を折り曲げてべたりと足をつけてしまっていた。ああ……。ダメだ。さっきの感覚は所詮、感覚でしかない。頭が勝手に作った錯覚だ。私は、目の前の舞台上で繰り広げられる”劇”をただ呆然と見ることしかできなかった。

「くっ。力が……。なんて強さだ。こっちがっ、引っ張られる……」

^{やどり} 宿厘はあたかも綱引きをしているかのように、^{つむぎ} 紬 の腕を掴んで歯を食いしばりながら床

を踏みしめる。だけどその努力もむなしく、^{つむぎ} 紬 の足は止まる素振りも見せない。広い舞台の上を、3つの懐中電灯スポットライトかのように照らされた絡新婦へと一步一步近づいていく。絡新婦は口角をわずかにあげ、あざ笑うかのように2人を静かに見つめていた。
「止まっ、てえ……。やだ、やだよう」

「こんのクソっ！ ^{つむぎ} 紬 をっ、離しやがれ！ おい……。おい！！！」

絡新婦のそばへと2人の少女が到達してしまった。ようやく足が止まった^{つむぎ} 紬 が、わずかにこちらへ首を向ける。きっと、今ワタシたちが感じている以上の恐怖を感じている。彼女の青ざめた顔が何メートルも離れたところにいる私でさえはっきりと分かった。^{やどり} 宿厘は相変わらず威勢良くヤツを睨みつけていた。

不意に、絡新婦のしなやかな右手が上に挙げられた。一体何を……。そう思った瞬間、ザァッという風で木々の葉が擦れたような音が響く。そしてナニカで遮られていたはずの弱い陽の光がかすれる程度に差し込んだ。

「なっ。なんだよコレ！ おい、くっ、来んじゃねえよ！」

数え切れないほどの多くの蜘蛛がどこかから現れると、ただ立ち尽くすばかりの^{つむぎ} 紬 と

^{やどり} 宿厘にへばりつく。それは逃げる隙も与えぬほどに2人の体を這い回り、白く細い糸を巻きつけ始めていった。空中に浮いたように体が固定されたのを見計らうように、アリやムカデ、カナブンやてんとう虫にカマキリ。さらには名前のわからない大小様々な蟲の大群が、

2人の体に群がっていく。

「(まさか、あの窓がいきなり暗くなったのは暗幕なんかじゃなくて……)」

頭の中で、言ってしまうと最悪の可能性がぼんやりと浮かび上がってきた。なんとか振り払うと首を振るけれど、力なくゆっくり動くばかりでそれは全く拭えなかった。

「ひっぐ、ひっ。き、もちい、わあっ、わるいいいい……。んうっ、んぐっ」

「だ、大丈夫だ！ つむぎっ、なんとかなるからっ。だからそんなに泣くな……。！」

肌に上を走る不快な感触。耳元に走る気味の悪い羽音。グロテスクな見た目。声を押し殺す

ようになく^{つむぎ} 紬 に、^{やどり} 宿厘はひたすら声をかけていた。だけど、彼女も怖くて不安なはず。

こんな状況で、ましてや私たちはそれを見ることしかできないのに、なんとかなるなんて信じようにも信じられない。それでも湧き上がる不安を隠して、少しでも励まそうという強い思いが、彼女の声に浮かび上がっていた。

「えうっ、ぐっ。な。んとがっでえ……。でもっ、でもっ……。うああん」

「んぐっ！？」

まるで『黙れ』とでもいうかのように、2人に巻き付いていた絹のように柔らかな糸が、し

かし^{つむぎ} 紬 と^{やどり} 宿厘の獅子にキリキリと音を立てそうなほどの強さで食い込んでいく。

その様子を楽しそうな目で見ている絡新婦が動き出した。

「ひっ……」

^{やどり} 宿厘が引きつった声を出す。

8つの足を器用に動かして^{やどり} 宿厘の首元に顔を近づけたのだ。

あの勇ましい雰囲気はどこへやら、絡新婦の真っ黒な瞳に見据えられた^{やどり} 宿厘は言葉を失っていた。

「いたっ」

不意に^{やどり} 宿厘が顔を歪めて言った。一体、何が起きた。絡新婦が^{やどり} 宿厘の首元に顔を近づけて、だけどそれ以上は全く見えない。だけどなんだろう？ 少なくとも今まで以上にヨクナイことだというだけはわかった気がする。

「^{やどり} 宿厘ちゃん……。っ、やどりちゃん！ くびっ、くびいっ……。くびい！」

「「「え？」」」」

「やっ。や。だあっ！ だずけでえっ……。やだよおっ！」

「……。なんだよ、これ」

カイツツが首元から口を話すと同時に、ぐちゅりという音がした。胸のあたりの糸がじわじわと紅く染まっていく。絡新婦が開いた口からはどろりと真っ赤な色をした液体と、鮮やかなピンク色をした肉片が舞台上へ落ちる。

その光景に、私は。いや、私だけじゃない。全員が目を見開いた。

「うそ、でしょう？」

^{なぎさ}
風咲がポツリと呟く。その言葉を合図に、全ての虫が——。

悍ましい蟲たちの羽音と脚音。そして吐き気を催すほどの生々しい臭いと断末魔がフロアに響き渡る。小さな口々で少しずつゆっくりと若く柔らかな 2 人の肉が貪られてゆくその光景に、残された私たちは皆気を失ってしまった。